

あなたの生活に 文学を

阿部 公彦

小説は「心の中」を描きま
す。作家たちは、そんなもの
実在するのかわりに10
0年前には疑問視しました
が、たとえ「心」が虚構でも、
政治や法律も含め、近代文化
はこのホットな虚構を前提に
してきました。

だから近代小説も「心」の
熱気や情念を表現します。熱
に引き寄せられる。そこで思
うのは、こうした温度へのこ
だわりを生むのが実は外の
「寒さ」ではないか、という
ことです。カギになるのは寒
暖差ではなく、

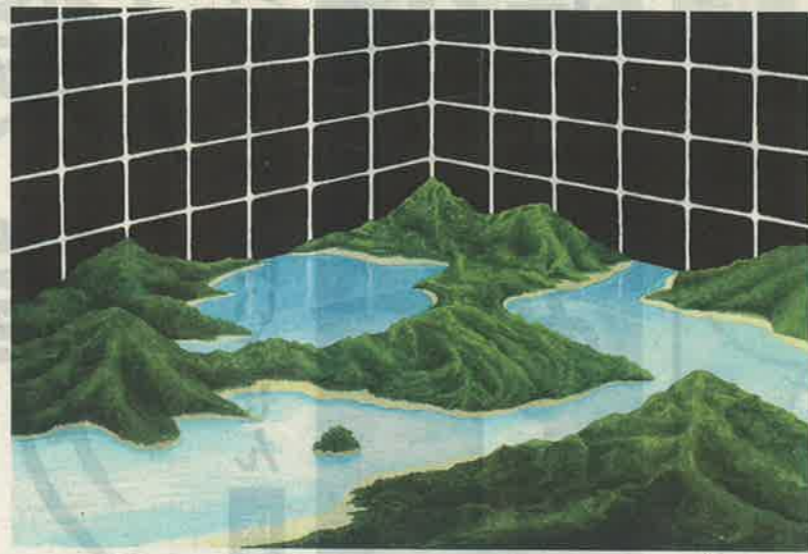
今年の夏はこのほか暑
い。そんな中、西村作品はい
かにも暑苦しい。舞台も暑い
季節。心の微細な動きを執拗
に追う描写にも、じくじくと
熱がこもる。背景の冷涼さゆ
え温みがいとおしいという気
分は、この小説にはありませ
ん。でも、読んでいると、こ
の暑苦しさがけつこういひ。
それは要所で「冷ます」ひと
言が効くからです。

西村さんの文章には、常に
小さな裏切りがひそむ。味噌
の描写が「何んだかもつ、こ
れから病院のそれ専用の窓口
に提出する検便にしか見え
ぬ」とあっても、あとにそ
れを裏切るひと言が続く。絶
妙の温度差です。熱い心を
冷ますことで、心を生け捕
りにする。これが西村流なの
です。

今月のいち推しは西村賢太
さんの「羅針盤は壊れても」
(「群像」9月号)。ファン
はもちろん、初体験の方にも
お薦めできる熟成の風味で
す。おなじみ北町貢多が味噌
の訪問販売のアルバイトをし
てみた、という話ですが、読
み始めるととまらない。文章
に傾斜でもついているかのよ
うです。

ただ、西村さんの魅力を十
分に説明するのは意外と難し
い。笑いも人物描写も落ちも
決まっているけれど、それだ
けではないのです。

少し迂回路をとってしまし
よう。そもそも小説が書かれ
読まれたのはどんな「土地」だ
ったでしょう。フランス？
イギリス？ ロシア？ 少な
くとも言えるのは、近代小説
誕生の背後に比較的冷涼な風
土があったということです。



絵・片山高志

西村賢太「羅針盤は壊れても」

今月は古市憲寿さん「平成
くん、さようなら」(「文学
界」9月号)も話題でしょう。
社会学者としてメディアで発
言し、政府の有識者会議にも
加わってきた古市さん。いさ
さかのデフォルムを加えつつ
自画像と他者像をミックスし
ます。「みんな、こんな風に
見てるんじゃないよ」と言わん
ばかり。

ここでも「小説の温度」と
いう視点をとってみたいよ
う。主人公の平成君は肉体接
触を嫌い、同棲相手との性交
渉を忌避する。ブランド名を
ならべた生活には全体にパー
チャル感。望みは安楽死。全
体にフラットで温度が低い。

村上春樹さんの「風の歌を
聴け」や田中康夫さんの「な
んとなくクリスタル」のとき
もそうでしたが、「小説」の
読者は冷たさを警戒します。
しかし、「平成くん、さよう
なら」では思いがけず主人公
の足が臭かったり、安楽死願
望に秘密があったり。冷たさ
の中に温みへの希求がある、
とも見える。その点ではクラ
シックな作品です。

ただ、同棲相手の視線に映
る平成君が持つのは、内面よ
りも自意識。古くさい「心」
にかわり、恠げな意識の「目」
がガードを固める。ならば、
なぜ小説という古くさい形式

冷たさの中に温みへの希求

古市憲寿「平成くん、さようなら」

を選んだのでしょうか。いつそ
この「目」の暴走を読みたい
とも思う。

鴻池留衣さんの「ジャッパ
ン・ロール・ヒーロー」
(「新潮」9月号)は、ダン
チュラ・デオというバンドが
巻きこまれる国際的な陰謀を
描く小説です。冷戦の終わりに
抹殺されそうになったスパイ
の未審がどう処理されるか。
謀略なりすまし、殺人など、
暴力もエスカレートする。

この作品は現実とフィクシ
ョンの境目があいまいです。
危険が迫っても全体にうす
ら皮膚がかかったような非現
実感。ところが「平成くん、
さようなら」と異なり、ここ
には妙な熱気がある。心と世
界との境目が不分明なせい
で、登場人物の熱が世界にそ
のまま感染し、妄想が蔓延す
る。読み進めるにつれ、ずぶ
つと深みにはまります。

ちなみに近本洋一さんの
「括弧に入れられた心」
(「すばる」9月号)は日本語
で「心」がどう語られうるか
を論ずる力作評論です。正直
にならぬことと事実を語るこ
の違いは？といった点から出
発、日本語の事実に対する責
任のとり方のあいまいさを追
究します。日常の発話も射撃
に似て、もつとたつぷり語
つてもらいたいテーマです。
(英米文学者)

象徴のうた

平成という時代

永田 和宏
24

やはり昭和天皇の力が大きいだ
ろう。

野の道を歩いている。いろんな
草花があっても、名を知らないも
のが大多数だ。名を知らないど
それら一本一本はそれぞれしく、
興味を引くこともない。

しかし、なかに一つでも名を知
っている草花があると、景は一気
に親しみの表情を見せるものであ
る。自然や風景の豊かさを感じる
瞬間でもある。名を知ること、
それを個別に識別することであ

植物研究続けた昭和天皇

病床でも著書への情熱

昭和天皇の言葉として「雑草と
いう名前の草はない」との意味の
言葉は有名だ。実際には侍従長で
あった入江相政編の「宮中侍従物
語」に出てくるエピソードである。
昭和天皇と香淳皇后が那須の御
用邸で夏を過ごし、帰ってこられ
る。その前に吹上御所の前の庭草
を刈ってしまおうということにな
った。建物周辺の草をきれいに刈
り取っておいたところ、帰ってこ
られた昭和天皇からのお召しがあ
り「こいつを庭を刈ったのかね」
とお言葉。侍従がとっさに「雑
草が生い茂ってまじりましたの
で」と答えると、「雑草というこ
とはない」「どんな植物でも、み
な名前があつて、それぞれ自分の
好きな場所で生を営んでいる。人
間の一方的な考え方でこれを雑草
としてきめつけてしまうのはいけ
ない。注意するように」とお叱り

雑草といふ草はあらずといひたまひし

先の帝をわが徳ぶなり

平成13(2001)年 常陸宮妃華子

り、その認識によって自然は私た
ちと昵懇になる。世界とはそのよ
うに向かい合いたいものだ。

華子さまの歌は昭和天皇のこ
言葉を感じながら、そのこと
によって「先の帝」を徳ぶのであ
る。先帝という一般名詞がただ一
つの対象へ収斂する稀有な例で
もある。

昭和天皇のご研究は、腔腸動
物のなかでも進化的に原始的なヒ
ドロゾアから始まった。陸上の生
物としては、腐った木などに生育
する変形菌の研究から植物一般に
も及び、膨大な標本を資料として
残されるところに、30冊にも及ぶ
単著、共著などの研究書が出版さ
れた。

なかでも最後の著となった「皇
居の植物」は昭和63(1988)
年秋以降、下血が続く病床にあり
ながらも、原稿の吟味や追加など、
息を引き取る直前まで著書への情
熱は衰えることはなかったとい
う。研究者としての情熱と矜持
の感じられるエピソードである。

昭和天皇の研究への志向と情熱
は、今上天皇のハゼ類を対象とす

る魚類学へと受け継がれ、皇太子、
秋篠宮両殿下のそれぞれ水による
交流史、および淡水魚の系統分類
学へと受け継がれている。

また常陸宮殿下は長く日本癌学
会の名譽総裁も務められている。
もう30年以上も前だが、私自身ま
だ癌学会で活動をしていただけ、
学会でよくお見かけした。

一般会員と全く同じように、コ
ーヒーブレイクの列に並ばれ、一
度はたまたま私の後ろに並ばれた
こともあった。学問の世界ではも
ちろん皇族であっても一研究者に
は違いないから、特別な配慮はな
く、私も順番は譲らなかつたが、
とても爽やかな光景であった。

昭和天皇から現在の皇太子、秋
篠宮殿下まで三代にわたって引き
継がれてきている学問、研究を大
切にし、かつ自らもそれに関わっ
ていかれるという皇室の伝統は、
わが国の「知」に対する尊敬の基
盤として大切な役割を担ってきた
はずである。

(歌人・細胞生物学者)
〈月曜日に掲載します〉